

令和7年度第1回茅ヶ崎市文化生涯学習プラン推進委員会会議録

議題	<p>1 茅ヶ崎市文化生涯学習プラン単年度評価について(諮問)</p> <p>2 茅ヶ崎市文化生涯学習プラン単年度評価「行政評価」への質疑</p> <p>3 答申までのスケジュールについて(事務連絡)</p>
日時	令和7年6月23日(月) 午後3時から午後5時30分まで
場所	茅ヶ崎市役所 本庁舎4階 会議室3及び4
出席者	<p>野田邦弘委員長、山口理紗子副委員長、森井健太郎委員、野田穂委員、栗林大空委員、岩本一夫委員、沼上純子委員、青木幸美委員、渡邊哲也委員、荒井純一委員、西澤秀行委員、井上由佳委員、伊藤隆治委員</p> <p>(欠席委員)</p> <p>入江観委員</p> <p>(事務局)</p> <p>佐藤市長、大竹文化スポーツ部長、菊池文化推進課長、多田主幹、井上課長補佐、豊原課長補佐、坂田課長補佐、大久保主査、田中主査、池田主任</p>
会議資料	<p>次第</p> <p>資料1 施策1～4 単年度評価(令和6年度行政評価)</p> <p>資料2 行政評価への質問票</p> <p>資料3 答申までのスケジュール</p> <p>資料4 委員名簿(令和7年4月1日現在)</p> <p>資料5 施策1～4 行政評価への質問票(回答)</p> <p>資料5添付資料1 令和6年度文化会館実施事業一覧(理事会資料抜粋)</p> <p>資料5添付資料2 令和6年度美術館展覧会一覧</p> <p>参考資料1 茅ヶ崎市附属機関及び懇談会等の設置及び会議の公開等運営に関する要綱(抜粋)</p>
会議の公開・非公開	公開
非公開の理由	—
傍聴者数	0人

1 開会

(開会挨拶及び職員紹介)

2 諮問

諮問の趣旨

本市では、令和6年4月1日に、「みんなが学び未来を創造する文化生涯学習のまち ちがさき」を目指す姿とし、3つの基本目標及び基本目標を達成するための4つの施策を位置づけた「茅ヶ崎市文化生涯学習プラン」を策定しました。

本プランは、令和6年から12年までを期間としており、進行管理として、毎年の単年度評価に加えて、中間に当たる令和8年度に中間評価を行い、評価結果を踏まえて必要に応じて見直しを行うこととしております。

また、本プランにおいて、市は単年度評価において本プランにおける各施策の年度実績を評価し、推進委員会に報告し、推進委員会は、事務局の評価に基づき施策ごとに評価を実施し、取り組みの見直しや内容の改善などについて意見・提言を行うこととしていることから、市が作成した令和6年度実績の評価について貴委員会に報告し、意見等を求めるものです。

3 会議録の形式変更に係る確認

効果的かつ効率的な運営及び議論の内容の明瞭化のため、これまでの逐語録を改め、摘録に変更する旨の事務局からの提案について、委員からの承諾を得た。

(参考)茅ヶ崎市附属機関及び懇談会等の設置及び会議の公開等運営に関する要綱(抄)

(附属機関の運営等)

第13条 附属機関の運営等に当たっては、効果的かつ効率的に行い、次に掲げる事項に留意するものとする。

(5) 審議の経過等が明確となるよう議事録を作成すること。この場合において、発言者の氏名と発言の全内容を記載する議事録、発言者の氏名の省略又は発言内容の要約を行う議事録その他議事録の形式については、附属機関の決定により選択するものとする。

4 議題

(1) 茅ヶ崎市文化生涯学習プラン単年度評価「行政評価」への質疑(施策1)

(資料説明)

(以下、資料5「施策1～4 行政評価への質問票(回答)」に基づき、審議を行った。)

○野田委員長

4 市民ふれあいプラザコンサートについて

横浜市民広間演奏会(年に50回程度の開催)がよかったので、茅ヶ崎市役所でも、近くの部署の業務に配慮しつつ、増やせるのではないかと考えた。

○野田委員

6 美術館学芸員について

活発な活動が素晴らしい。学芸員が重要な存在だと思う。市と指定管理者の間で過去のビジョンがあれば知りたい。数年前に金沢 21 世紀美術館の学芸員が大量に辞めたり、学芸員の置かれている状況が厳しいと聞いたことがあるため、茅ヶ崎市の場合を知りたかった。

⇒事務局(豊原課長補佐)

学芸員のやる気をそがないよう、そして、市の施策と学芸員の考えにミスマッチがないよう、令和7年度、8年度以降の事業を話し合い、齟齬が生じないよう意思疎通を図っている。また、四半期ごとにモニタリングを実施し、意識の共有や事業の進行管理を行っている。

21 美術館ウェルカムカード(無料観覧券)について

来館は“ウェルカム”だが、来館までの体制が整ってないと、行きたくても行かれない人はたくさんいるのではないかと思ったことが質問の経緯である。公共交通手段の無料での利用はできないため、駐車場料金の減免や、同伴者の割引等、何かアイデアはあるか。

⇒事務局(豊原課長補佐)

引き続き検討する。

○森井委員

3 参加者の世代について

ウクレレワークショップにどのような世代が参加したのか、興味があった。子どもが音を鳴らすだけで終わっていたり、あるいは、シニア世代を中心とした体験であったり、参加者の世代が偏っていることがよくあるが、このワークショップは、世代が散らばって参加していたのがよいと感じる。

10 参加者が集まりにくい講座の周知について

日本舞踊は、最近映画『国宝』で話題になっているが、通常は大勢の参加者が集まる企画ではないような気がしていた。広く周知していることが確認できた。

13 まなびの市民講師自主企画講座について

自己実現や自己承認に係る重要な事業だと思うので、評価する。

16 講座のアーカイブの保存について

市の回答内容では、やったことが一過性となり、記録として残るだけになるので、DXを推進しているのだから、講座開催後の検索性や再現性を担保したらよいと思う。著作権の課題等クリアすべきことがあるのは承知しているが、資料や内容をオープンにできれば、さらに深みが出る。

22 参加者の世代構成及び入場者数

「音楽やアートに気軽に触れられる空間創出」は、きれいな言葉だが、かなり難しいことを言っている。音楽とは何か、アートとは何か、という定義から入り、それに気軽に触れられる空間を創出するというのは、とても大変だと思うので、内容を深く知りたかった。備品の用意等、簡単ではない作業だ。画材等を用意し、自由に遊んでもらうのは、アートに触れること、そして、クリエイティビティの醸成になる。そのような空間がたくさんあることが、アートにおける創造空間の創出に寄与すると考える。

23 参加者の世代構成及び入場者数

ウェルカムカードを配付し、実際に来館されたのは、評価されるべきことである。

○西澤委員

7 関連イベントの周知について

人を呼び込む工夫があったからこそその来館者数だろう。また、人数が少なかったから失敗ということでもない。ただ美術鑑賞に訪れるのではなく、関連イベントがあるから行ってみようということにもなるので、引き続き、このような観点での取組は、広報していったらよい。

12 市民まなび講座参加者の感想について

職員の負担は承知しているが、参加者の思い等を把握することで、今後の活性化につながるヒントが必ずあると思う。記録を残すことに縛られず、提出されたアンケート用紙原本を担当職員が読むだけでも、改善につながると考える。公開しなくてもよいので、参加者の感想等を求めて、良かった点と悪かった点、今後検討することを把握して、より良くして行ってほしい。

15 講座の対面開催及びオンライン同時配信について

主催者側の大変な部分もあると思う。参加者や開催者の思い、不具合な面とよかった面を把握し、不具合が少しでも少なくなっていけばよいと考える。主催者だけでも、どんな小さな声でもよいので、せめて感想を見られる環境を整えたほうがよい。

19 美術館ウェルカムカード(無料観覧券)について

観覧料の免除、授乳室やおむつ交換台の設置はわかるが、小さい子どもは、飛び跳ねたり、走り

回ったり、声を出したりすることがある。美術館という場で、子連れの人と子連れではない人と共存していただく覚悟があるか。本当にウェルカムというからには、例えばベビーカーをどこに置いてよいのか等、子連れの人の方の具体的な意見の聴取りが必要だと考える。授乳室があるから出かけるというわけではない。例えば、母親が授乳室で待っていて、父親だけが楽しむのか、あるいは交代で楽しむのかということになる。これは決してウェルカムな感じはしないので、もう少し寄り添い、子連れの来館者ができることが具体的にできているとよいと思った。まずは、1日だけでも開催してみるのもよい。その後、日にちを増やしたり、時間を区切ったり、工夫をしていったらよい。

24 “ハイブリッド開催に加えた様々な手法”による講座の開催について

どのような工夫があるのか知りたい。できることから少しずつでよいのでいろいろな工夫を行ってほしい。そして、参加者と開催者の感想はぜひ生かしてほしい。開催した又は開催しなかった、人数を把握した、開催してよかったという、子どもの作文のようにならないよう注意してほしい。

○青木委員

8 展覧会等の周知について

興味がある人はホームページ等にアクセスし、自分でどんどん調べ、行きたければ行くと思う。夏休みも近く、長期預かりはお金もかかるため、親子参加イベント等を探すこともある。商業施設の掲示板等に催しの案内を貼る等、買い物や日常の行動範囲内で情報が入るような工夫をしていくとよい。今の保護者は、インターネットを結構閲覧するため、SNS等も活用し、活発にしていってほしい。勤務先の幼稚園においても、夏休み前にチラシを貼る等の協力もできる。

○山口副委員長

9 記載以外の展覧会の名称、期間及び観覧者数について

学校や地域の芸術団体と連携した展示等の集客について知りたい。学芸員が注力して結びついた結果、プロセス、方針が他市にない魅力で、学芸員の評価にもつながる。何に興味を持ち来館したかが大事である。いろいろな角度で関心を持てると、興味も広がるので、展覧会の内容は評価する。

○沼上委員

市民まなび講座について(14関連意見)

実際に市の事業を学べる点が良い。

○渡邊委員

来館者アンケートについて(7関連意見)

展覧会ごとのできごとをつなぎ、また行きたい、もう一度行ったら違うものが見られるということが

加速すればいい。アンケートのフィードバックはなかなか難しい。美術館では中高生の美術展があり、新しい来館者を開拓できるチャンスである。アンケートの設問に、例えば、このアートがあなたの人生にどのような刺激になりましたかということを入れ、回答を、テキストマイニングによるワードクラウドにして、公共施設に掲示すると、美術館への関心を得られる。ワードクラウド自体もカラフルでアートのなので、次に生かす取組ができたらよい。積極的に、試行的に、良いものは使ってほしい。

○伊藤委員

事業の周知について(8関連意見)

施策1に記載のワークショップや日本舞踊、コンサートの主催が見えてこない。また、想定参加人数と実際の参加人数のギャップから、良い、悪いと評価するのではなく、募集方法の検討につなげたほうがよい。実施した事業は、どれも良いが、広報できずに、知られないまま終わっていたことも結構多いかと思う。主催者の違いがわかるよう、広報のあり方は重要である。美術館事業は指定管理なので任せてよいが、見つけやすくする、参加しやすくする環境づくりが一番大事だと感じる。

○栗林委員

市民まなび講座参加者の感想について(12関連意見)

主催者側の感想を収集し、フィードバックしたほうがよい。

⇒事務局(井上課長補佐)

市民まなび講座報告書の様式変更を検討する。

(2) 茅ヶ崎市文化生涯学習プラン単年度評価「行政評価」への質疑(施策2)

○岩本委員

1 まなびの市民講師について

基本的に営利目的ではないということだが、市民からの依頼による講座と自主企画講座では、講師料に差がある。生涯学習ガイドブックを手にとった市民が混乱しないか。市民は、掲載されている講師は、市に関係する団体として何かのお墨付きをもらった講師であると考えてる人も多いと思う。また、それを利用して、弟子集めのために市民講師の登録をする可能性もあり得る。それから、実際には講師としての力量や信頼度等、質の差があると思うが、市民講師としての登録以降は各自で取り組む現在の制度は、果たして問題はないのか。無責任すぎるのではないのか。「検討します。」という表現を市は使うことが多く、期限も定めず、終わることが多い。目標を立てられないわけではないと思う。具体的な日程を言えない事情があるのか。

⇒野田委員長

大きな目的が、資源を次の世代に教え、伝えていくこと。それは学習の目的でもあることは間違いない。しかし、これを文化政策として見たときに、素人のような講師でもよいのかという疑問にも

なるので、難しいところではある。とても大事な指摘だと思うので、事務局には引き続きいろいろな事例や他市の状況を研究してほしい。

⇒沼上委員

自分自身、様々な団体に所属しているが、生涯学習ガイドブックは、学習したいときの講師選びに役立っている。いわゆる素人の方も、回を重ねると上手になっていく。積極的に依頼すると、次回に向けた改善にもつながり、利用者のスキルアップにもなる。生涯学習ガイドブックは、本当に充実していて良い。

○森井委員

2 まなび市民講師の活動が波及する年齢層について

施策2と施策の方向は、現役を退いた方や現役世代も含めて学んだスキル等を伝えることで、次世代に還元し、循環を促す仕組みだと思う。しかし、実際には、歴史等を語ったり、市民への講師を務めるとなると、大体同世代の方や知り合いが大勢聞きに来るという横の循環が起きている。次世代につながるという縦の流れを作ることができるのか疑問である。例えば、学校に行ったり、放課後にどこかへ出向き話すような、次世代に受け継ぐ仕組みができていないのであれば、作る必要がある。記載されている、次世代担い手育成につながっていかない。循環する仕組みは、講師自身で作ることは難しいので、市がその役割を担うことを検討したら面白い。

3 まなび市民講師の活動が波及する年齢層について

貸館であるハマミーナまなびプラザの利用者がいることが、ある意味、文化の醸成を支援していると読める。貸館は、文化活動の場を提供するから文化支援であると捉えるのではなく、もっと突き詰めて強く書かなくてはいけない。市民講師が自主企画講座の会場とする場合もあることをもって、市は講座の開催を支援したという趣旨の記載もあった。例えば、どのような講座にどのような支援を行ったのかを具体的に提示すると、単なる貸館ではなくて、文化活動の支援が見えてくる。

○野田委員長

4 まなび市民講師の指導分野の内訳について

指導分野の偏りがわかり、整理の仕方は工夫したほうがよい。クリエイターシティ・チガサキを推進しているので、明日のクリエイターを養成するよう充実させたほうがよい。

○西澤委員

6 ハマミーナまなびプラザの利用者について

利用者登録者数の増加は、活動発表の場として広がりを見せているのか。利用者は、リピーターなのか、新規登録者なのか。

7 ハマミーナまなびプラザの利用種目について

新規登録者は、どのような分野での利用か、利用種目が広がっているのか。具体的な利用種目の提示を願う。施設を貸すだけでなく、利用率の向上やクリエイターの利用の促進につながるよう、把握してほしい。

⇒事務局(井上課長補佐)

音楽室は、ミュージシャンを生み出すことに寄与する。利用種目については、勤務している会計年度任用職員に細かく聴取りを行い、定性的な部分も把握することを検討する。

○野田委員

8 茅ヶ崎みんなのアートフェス「でっかいホールで演奏するぜ！」について

大ホールでの開催は、吹奏楽部の演奏や合唱祭以外ではあまり機会がないと思うので、とても良い。大ホールの収容人数は1,000人以上だが、募集团体数が少なく、想定に参加者数も300人程度なので、もっと大々的に使うのはどうか。市内の高校だけではなく、県内の高校200校以上に周知したらよい。SNSでの周知については、何のアカウントか。

⇒事務局(豊原課長補佐)

茅ヶ崎市文化スポーツ振興財団のSNS、市のLINE、X等で配信に加え、広報紙に掲載している。募集チラシの配布については、市外の高校にも案内できるようにしたい。

11 平和事業との連携について

ピーストレインの参加者向けの講座は、人数が限定的なので、より多くの子ども向けに開催したらよいと思う。

12 教育現場で活用できる学びの機会の提供について

校長会でのPRによって、教員が参加しやすくなるか、疑問である。

○荒井委員

9 アウトリーチ事業について

文化芸術教育プログラムはすばらしく、貴重な機会だが、現状はスケジュールの都合上、隙間が全くなく、カリキュラムへの追加が難しい。一方で、少人数単位での開催となることが多いが、良いものは学年全体で経験してもらいたい。そのような理由で、チラシや回覧等を教員に回覧しても、実現が難しいとすぐに判断されることが多く、現在は導入が難しい。1~2年前に計画して初めて成立させられる可能性がある。

10 教職員等向けのプログラムの参加状況について

平日の定時退勤が皆無の多忙な教員にとって、外出は難しい。また、土日は、部活動等があり、残念ながら、教員自身の教養を深めたり、研修の時間が取れていないのが現状である。無料で参加できるプログラムなので、教頭という立場上、宣伝は行おうが、なかなか教員の足は向かず、余裕もない。「工夫してまいります。」との回答だが、現実には、働き方が変わらないと、教員の参加は難しい。

(3) 茅ヶ崎市文化生涯学習プラン単年度評価「行政評価」への質疑(施策3)

○野田委員

9 『茅ヶ崎市史』について

『茅ヶ崎市史』の改定は、『ヒストリアちがさき』の出版をもって新しい内容を補っているということだが、かなり解釈が変わっている部分もあるようだ。厚さもあり、市内だけでなく、他市の図書館にも置いてあるので、正誤表のように、どの部分がどのように新しくなっているか、併せて配架できるとよいと思う。

○伊藤委員

茅ヶ崎ゆかりの人物館について(4関連意見)

現在、「十四世名人木村義雄展」を開催しているので、ぜひ多くの人に来館いただきたい。また、本展示に協力いただいた日本将棋連盟には、カフェや将棋を指せるスペースがあり、多くの棋士の目に触れるので、ポスター掲示を依頼したい。

⇒野田委員長

以前、茅ヶ崎市がペンクラブと共催したときもそうだったが、大きなポスターを見て実際に足を運ぶ人も多い。それは文化ツーリズムであり、勢いが出るので、SNSの活用も含め、ぜひ工夫して、市内市外関係なく周知をしたほうがよい。

⇒事務局(坂田課長補佐)

既にチラシは日本将棋連盟に送付し、配架いただいているが、ポスターはとても目につくので、印刷し、掲示を依頼する。先日、現役棋士の森下九段を招き、ゆかりの人物館で講演会を開催したところ、市外からもたくさん来館された。市外への周知方法を引き続き検討する。

⇒森井委員

社会教育課所管のちがさき丸ごとふるさと発見博物館(以下「丸博」という。)でも、いろいろな都市資源や文化資源を掘り起こす活動を行っている。市民とともに調査研究を行う「ゆかりラボ」は、丸博との親和性がとても高く、純水館や南湖院等を扱うなど、活動も似ている。一本化したり、協力して、互いに手を携えれば、もっと太い幹になるが、それができないということが、市民から見ると、いつもとても不思議で、もったいない。歴史やふるさとへの愛着となる、その土地の謂れや関わる人物のことが、もう少し太い幹になるとよい。事務分掌や中期経営計画の中で、双方が歩み寄れば、

市民としても、活動を進める際のターゲットを絞りやすく、その発展に協力しやすい。

⇒事務局(菊池課長)

文化推進課、社会教育課及び博物館の各事業は、とても似ているが、各部署の色を出しながら行っている。事務分掌に従い、各課が所掌する範囲内で、事業を忠実にやっている。その時々機構上、事業の所管が市長部局や教育委員会等異なるが、今のやり方が最善だとは思っていない。将来に向け、機構改革の検討や協力体制の構築を行う。

○岩本委員

3 別荘文化に関する歴史の継承について

丸博が別荘歩きをするときに作った資料はすごい。丸博の資料こそ、ブックレット等の特集号としたらよい。

速水御舟氏のアトリエは非常に貴重なものだが、なぜ取っておこうとしないのか。茅ヶ崎館も工事し、元の形がなくなってきている。いろいろな屋敷が、この数年でなくなった。名古屋の「文化の道」には古い家がたくさん残っているが、行政ではなく、民間が残しているものも多い。「お金がかかるが、大丈夫か。」と質問したところ、「なくすのは簡単だが、一旦壊したら元に戻らないから。」とおっしゃる。文化財を大事にするのは当たり前だと考える文化の道の方々を大変偉大だと思い、感心したことがあった。文化財は一旦壊したらもう絶対に戻ってこない。写真を撮って残しておけばよいという問題でもない。お金がないからと済まさないでほしい。今だったら、やれることはまだまだある。茅ヶ崎の別荘文化がどれほど茅ヶ崎の発展に貢献したのか、研究して、頑張ってもらいたい。

⇒事務局(菊池課長)

文化推進課の取組としては、茅ヶ崎にとって貴重な別荘文化を、刊行物により今の市民の方と次世代の方に周知している。建物自体を市で保存することは、予算の都合上、難しい。

⇒岩本委員

回答に歴史の継承を行うと書いてあるから、なぜ保存しないのかと言いたくなる。若い人にも伝えると言っていたが、茅ヶ崎市史の全巻を持っている職員はこの場にいるか。生涯学習の担当職員が持ってないのが現状である。これを読めば、茅ヶ崎の別荘がわかるよう、読みやすく作られているから、まずは担当職員が買って読んだほうがよい。周知しているとはとても言えない状況である。例えば漫画で表現することも一案だ。「漫画でみる茅ヶ崎の別荘」と題して、偉人のことを伝えれば、多くの人を読む。歴史を継承したいのであれば、若い人も読みやすいものを作らなければいけない。誰も買わないようなものなのに、市は歴史を継承しており、読んでもらっていると捉えるのはよくない。ブックレットは、非常によくできている。ブックレット『茅ヶ崎の別荘地1』『茅ヶ崎の別荘地2』『茅ヶ崎の別荘地3』等を作り、書店に置いたり、学校教育の副読本とすることが一番よい。そうすれば、若い人にも伝わる。そういう方法を考えながら、進めてほしい。

⇒伊藤委員

可能ならば、やはり建物や別荘は残してほしいという気持ちがある。財政上不可能であることは重々わかるが、やり方はいろいろあり、お金のある人に購入してもらい、市や市民が維持のサポートを行うということもあり得る。そういう人をうまく巻き込みつつ、クラウドファンディング等やり方を工夫すれば手立てはある。国登録有形文化財の葉山加地邸という、フランク・ロイド・ライトの愛弟子が設計した別荘等があり、友人が購入した。今は建物の基本設計は全て残し、宿泊施設としてオープンしている。民泊は365日のうち180日運営すればよいので、残りの180日はプライベートの別荘とするようなやり方もある。建物は一度壊されたらもう戻らず、存在しなくなってしまうので、やり方を検討する余地がある。

⇒野田委員長

別荘文化は茅ヶ崎の成り立ちの胆だと思う。ユネスコ創造都市ネットワークの加盟申請書案の作成時やクリエイターシティ・チガサキを推進する際も、茅ヶ崎の歴史的ストーリーをどこから書き始めるか悩んだが、そのような都市のアイデンティティーが帰着するところは、やはりシビックプライドである。いろいろな工夫をし、どうしたら残せるかを考えることも、必要だ。

○荒井委員

7・8 取組の実績の記載内容の重複について

せっかく工夫して取り組んでいるのであれば、工夫した記載をしたほうがよい。

⇒事務局(菊池課長)

同じ事業がいろいろな政策に関わるが、今後は再掲の場合は、その旨を提示する。

○山口副委員長

11 旧南湖院第一病舎の維持管理について

旧南湖院第一病舎は、施策4のクリエイターシティ・チガサキ形成戦略事業における一つの重要な拠点として利活用することとなっている。平成30年に利活用基本方針を定めたが、その後どのようになっているか。活用は検討されているようだが、どのように進んでいるのか。先程の伊藤委員のように、改修に多額の費用が必要だからやめるのではなく、市民の創造的活動の場として保存・活用・維持していくためのいろいろな方法考えていくことが大事である。クリエイターシティ・チガサキの推進にもとてもよいので、ぜひ進めてほしい。

⇒事務局(坂田課長補佐)

平成30年の利活用基本方針を策定後、現状は耐震診断・耐震補強にまだ至っていない。旧南湖院第一病舎は、国登録有形文化財のため、普通の建築物とは違い、かなり費用がかかるが、クリエイターシティ・チガサキ形成戦略事業でのワークショップの際に、参加者からいろいろな意見があがったので、意見を反映しつつ、旧南湖院第一病舎の利活用を考えていく。

(4) 茅ヶ崎市文化生涯学習プラン単年度評価「行政評価」への質疑(施策4)

○野田委員

1 クリエイターシティ・チガサキ形成戦略事業の拠点について

予算の都合上、新しくつくることは無理だと思うが、茅ヶ崎駅北口を出てすぐに安いものを売るチェーン店が並ぶよりは、文化の香りがするような北口になったらよい。

6 クリエイターの活動支援及び環境整備について

クリエイターシティ・チガサキの周知と同時に、若い人が何かをやりたいときは、支援や相談の窓口の案内や広報があると、もっと盛り上がると思う。

12 文化施設への交通アクセスの整備について

「自転車のまち茅ヶ崎」を掲げているので、シェアサイクルをもっと活用し、いろいろな文化施設を回れたらよいと思う。コミュニティバスももう少し活用できないか。徒歩や自転車では、茅ヶ崎の北から南まで、東から西まで移動するのは難しいので、検討してほしい。

15 文化施設への交通アクセスの整備について

ユネスコ創造都市ネットワークへの加盟を目指すに当たり、大きなポイントである。昨年度、ワークショップ「みんなで話そう！クリエイターシティ・チガサキ！！」に参加した際、司会を務めた企業の人が、ユネスコ創造都市ネットワークへの加盟には、海外都市や世界に対して、茅ヶ崎がどのように貢献できるかという視点が大事である旨を話していた。茅ヶ崎は何ができていますか。市としてそれを把握しているか。絵本の翻訳・寄贈以外の具体的なことや、これからできることを提示してほしい。

⇒事務局(坂田課長補佐)

文化的・創造的資産を活用して持続可能な発展に貢献するユネスコ創造都市ネットワークが掲げる目標の視点では、加盟都市との交流としては、現在、茅ヶ崎ゆかりの絵本作家の絵本をインドネシア語に翻訳し、ジャカルタ首都特別州へ寄贈するため、市内及びインドネシアと諸々調整をしている。翻訳シール貼付と、絵本に添えるメッセージをインドネシア語で書くイベントには、ぜひ多くの方に参加いただきたい。異文化や、英語以外のアジアの主要な言語の一つに触れる機会を提供する。将来的には、相手国からも返事を送ってもらえる交流につながればよい。また、加盟都市以外との交流については、ハワイ州ホノルル市・郡との姉妹都市交流や、北マケドケニア共和国ホスタウン交流を行っている。

○西澤委員

3 クリエイターシティ・チガサキ形成戦略事業の拠点について

市との包括連携協定に基づく出張講座でのことだが、参加人数に応じ、2部屋を続きで使用し、実

施しようとしたところ、貸出用スクリーンが小さく、結局部屋を狭め、白い壁をスクリーン代わりにして、大きく映したことがあった。人数に対し、機材の限界もあると思うので、予算の都合もあるだろうが、クリエイターが集まる場の創出のためにも、ハマミーナまなびプラザをはじめ、設備や備品を充実化したほうがよい。

7 クリエイターシティ・チガサキ形成戦略事業の拠点について

今の子どもが将来大人になったときのことだが、年齢のことに限らず、先端芸術と言われているものに市民が触れる機会をつくれたらよいという意味である。次の世の中を生きるっていう世代という意味でも、多世代に行き届いてないということでもない。次の時代につながる芸術にも触れる機会を作ったらどうかという意見である。

○岩本委員

4 現在活躍するクリエイターについて

商業デザインや書く仕事をやっていて、周りに画家やカメラマンがたくさんいる。考えてみると、彼らはクリエイターだろう。クリエイターが集まる場を創出するにはどうしたらよいか。茅ヶ崎市文化団体協議会には、いろいろなものを創っている人がたくさんいる。作曲したり、ものを作ったり、創作に携わっている人を巻き込み、相談したり、参加してもらったらよい。

5 クリエイターの定義について

クリエイターというと、プロで頑張っている人と捉えがちだが、ここではアマチュアの人もそうでない人も皆クリエイターということで、なるほどと思った。「クリエイターのまち」というと、「プロの第一線で活躍する人に集まってもらうまち」かと思ってしまう。プロに限定すると、成功者と言われる人はほんの一握りで、クリエイターへの道を諦めてしまう人が非常に多いので、今後の展開におけるスタンスについて伺いたい。

⇒事務局(菊池課長)

クリエイターとは、プロとして活躍している方、プロを目指している方、そうではない方等々である。創造的な発想で行動したり、活動する人をクリエイターとして捉え、茅ヶ崎の文化的・創造的発展を目指している。茅ヶ崎に集まってもらい、複合的な取組がもたらす効果を期待している。

○森井委員

8 クリエイターシティ・チガサキの定義について

横浜市は、取組初期から、チャールズ・ランドリーやリチャード・フロリダの提唱等を基にどうするか考えてきた。やはりプロの方に、旧横浜市街に来てもらい、まちおこしをしようと、彼らの持っているクリエイティビティやクリエイターを活用しようと、いろいろやってきた。茅ヶ崎では、「クリエイター」を

どう定義するのか。クリエイティビティを持った人と広く捉えるのか、プロが集まり湘南の息吹でクリエイティブを盛り上げるのか。または、クリエイターを目指す人にとっての環境がすごくよいということならば、ターゲット絞る必要もあると考える。ユネスコ創造都市ネットワークへの加盟に当たっては、登録分野を決める必要があり、例えば文学分野で加盟するとしても、関連する創造分野との親和性として、音楽ならば歌詞も文学に含められ、映画ならば脚本も含められる。演劇ならば戯曲もあつたり、もちろん小説家や詩人もいる。何かをトリガーとして、どこかのタイミングで文学に振り切り、文学の視点から情報を集め、思い切って次のステージに進んだらよい。ゆっくり市民と作っていかうと考え、時間をかけるのもありえるが、ある程度ビジョンを見据えて、ポイントを明示しないと、市民には共通の認識が持ちづらい。ワークショップに参加したり、シンポジウムを聞いていても、参加者各々定義がバラバラであった。意見交換でも、自由にいろいろやりたいとか、自分の子どもがクリエイターであるとか、助成することがクリエイター・シティという話もあつたので、整理が必要だと考える。

⇒事務局(坂田課長補佐)

子ども対象の事業を行っている一方、市民は皆クリエイターだという創造都市宣言もしており、ターゲット等について検討していく。

○井上委員

国内創造都市について(8関連意見)

青森県八戸市では、本を活用し、まちおこしに取り組んでいる。全国を見渡すと他にもそのような自治体はあるが、八戸市の面白いところは、行政が主体となり、まちの中心に八戸ブックセンターを作ったことである。普通の書店では売れなくて取り扱われないが、ぜひ読んでほしい本を、敢えて行政主体のブックセンターに置くことで、多くの市民に優れた本を読んでもらいたいというコンセプトで運営している。クリエイターの養成に関しては、小説や文学作品を書きたいライターのために、無料で利用できるライティングブースを設置しており、文化や人をつくり、育てていく環境を用意している。その事例を見て、やろうと思えばできると思った。茅ヶ崎市よりも人口が少ない八戸市が、すごくキラキラと頑張っている姿だったので、ぜひ参考にしてほしい。

⇒野田委員長

八戸市は、10年くらい前から創造都市として、取組を始めた。ハッチ(八戸ポータルミュージアム)という交流と創造の拠点の施設をまちの真ん中に作り、いろいろな機能を詰め込んだ。市の直営で運営している。美術館も、ブックセンターも指定管理ではなく、直営で頑張っている。市長が決意して始めた。そうしたところ、驚くことに、まちの人流が大きく変わった。すると、市の職員がとっても元気になった。館長だった市の職員は、退職後、青森県の教育長に就任した。普通は市の元職員がそのような役職に就くことはありえないが、県も評価しているということである。成功事例を見ていくことは大事。直営ということにも、意味がある。他に、子ども向けのプログラムについても、コンペティションでNPO法人を選んだ。任されたNPO訪印も本気になり、そして、面白いこ

と始まったらしいと聞いた東京のアーティストも来るようになった。地域の特性が違うので、茅ヶ崎で同じ手法は取りづらいと思うが、考え方としては大いに参考になる。

⇒沼上委員

これまで、文化推進課で開催したクリエイターシティ・チガサキのワークショップやシンポジウムに参加してきた。参加者や登壇者からすごく熱いものを感じた。これからスタートし、自分たちが作っていくという、自信や誇り、気概はすごく大事で、どうせできないではなく、何ができるかという、その雰囲気はすごく大事だと思った。茅ヶ崎には、たくさんのクリエイターがいる。同じ方向を向けたらよいと思う。夢とロマンを与える事業である。たくさんの市民に熱いメッセージを送り続けてほしい。

5 答申までのスケジュールについて(事務連絡)

(資料説明)

6 閉会

(閉会挨拶)